

第7回藤原正彦エッセイコンクール入賞作品 講評
(審査員 藤原正彦姫路文学館長)

レベルがどんどん高くなっていて、選考には非常に苦労している。

【中学生部門】

最優秀賞「いいね！ステイホーム」(中井大輔さん)

これはまさにコロナ禍をコロナチャンスにした体験を書いたもの。ペストの流行で大学が休校になった時にニュートンが微分積分や光学・万有引力の法則を発見したように、筆者も大きな発見をした。

起承転結がある。何より「いい家族だなあ」と読者に自然と思わせるところが魅力。竹で椅子と机を作る場面では、弟には大した作業をさせていないところや、「僕にはこんな才能があったのか」と自慢話を率直に書いているところに自然とユーモアが出ていて笑ってしまった。「何かを世話したり、育てたりすることは、それをする人に喜びを与えてくれるような気がした」とは、中学1年生にして本質的なことにちゃんと気づいている。「外で食べる時のほうが、会話が増え、家族みんなが笑い、笑顔になることが多い」—ここともよく観察している。

唯一の欠点は、「あの三か月は一生に一回しかない貴重な時間になったような気がする」で終わらずに理屈や意味合いを一ページ近く付け加えたところ。ここで突き放して終わらないとプロの仕事にはならない。

優秀賞「この夏見つけた紙ワザのコミュニケーション」(大山凜菜さん)

先輩に暑中見舞いを書く、というテニス部の伝統を疑いもしなかった作者の感覚がまず流石である。伝統は一見どんなにくだらないようなものであっても軽々しく変えてはならない。作者は「お元気ですか」と書き始めたものの続きが書けない。「どうしよう」とは中学生だからこそその可愛らしい表現である。「ハガキで自分の気持ちを書くという行為は、落ち着きがなくて、違和感があるように感じた」と素直に書いている。

初めて暑中見舞いを書いたことで達成感を得たこと、そしてそれが「新たな自信にもつながった」とある。自信は努力しなければ得られないものなのである。さらには、手紙の方がメールやLINEよりもはるかに多くの気持ちを伝えられる、という。何気なく書いている中にいくつもの素晴らしい発見が見られる。作者がもう少し大人になったら、これを一歩進めて「デジタル本よりも活字本の方がより多くのことを伝え、深い印象を与える」といったことにまで気づいてほしい。

佳作「十五歳の夏に」(東野結香さん)

自分の趣味、“ときめくこと”がすぐには思いつかない作者。「なかばカンニングのような謎の罪悪感をもちながら、スマホのアルバムを見た」という表現が率直でいい。「一度写真を撮るといふ行為をするだけで永遠に記録が残るからこそ、自分で覚えておくことをしなくなったのではないか」—これは大発見である。まず写真、ではなく、まず心で嘔みしめること。作者はそうした重要なことに気づいていく。

内容は非常に豊かだが佳作としたのは、余計な言葉が多いためである。たとえば冒頭部分の「理由はいたって単純かつ明確だ」や「非常に深刻である」、「のんきにそんなこと言ってる場合じゃない」等々、読んでいる流れをずたずたに切ってしまう。これらがなければ、もっと上位の賞になっていただろう。

【高校生部門】

最優秀賞「伝える相手は」(近藤千紗さん)

英国の中学に通ったとあるが、どういう中学だったかをもう少し知りたかった。この作品は非常に優れた論説エッセイである。自分の意見を明瞭に述べ、説得力がある。たとえば、「歴史資料の多くはその時代のバイアスがある」といった見解など、あちこちに作者の教養が滲み出ているのは大したものである。そして原子爆弾について問われた作者が示した豊富な知識と、原爆を絶対に落とすべきではなかった、と言うべきことを言った勇氣。しかし、作者はそこで留まることをしなかった。海外におけるホロコーストと原爆に対する認識の違いに疑問を持ち、帰国後に『黒い雨』を読んで「原爆の犠牲者の無念さや後遺症で苦しむ人の辛さが、海外ではほとんど伝えられていない」と気づいた。これも発見であり、私もなるほどと思う。

生徒の立場でありながらちゃんと問題の本質を見抜き、英国の一流中学の人気教師を正しく批判した見識は素晴らしい。

優秀賞「車窓の景色」(永田来幸さん)

田舎からの電車通学。ある夏の日、駅員が停車中の涼しい車内で電車を待つよう勧めてくれた。そのことをエッセイの材料に選んだ視点が本当に独創的である。作者は、そうした体験から東京の親戚たちが言う「田舎の良さ」を発見してゆく。「全開にした窓から吹き込むさわやかな空気と白っぽい昼下がりの陽の光」とはうまい自然描写。

非常に感覚のいい作品。そして、いいネタを見つけた素晴らしい嗅覚を評価したい。

佳作「心の向日葵」(齋藤杏里紗さん)

文章も内容もエッセイとして完成された作品。家の前に咲く向日葵。花が開いてやっと気づ

いた、と正直に書いている。ただ、細かい点で具体性に欠けるところがあるのが残念だ。「努力していても、花開くまで気づいてもらえないかもしれないけれど、こうして生きていくんだと教えられているような気がして」と炎天下で立派に咲き続ける向日葵の姿を自分に重ね、「ご近所さんの誰かが、お水をやってくれているに違いない」、自分も誰かに励まされ生きているんだ、と思い至る。いくつもの立派な気づき書かれている。そして最後も非常によかった。「私は、私の心の向日葵となってくれている人を大切に、懸命に生きていくことを誓った。誰かの心の向日葵となれていることを信じて」。

【一般部門】

最優秀賞「さよなら、我が家」（感王寺美智子さん）

亡くなった父、そして兄と同居するために古家を出る母への思いやり。読んでいて本当にしんみりしてしまった。書き出しが非常にいい。「タクシーを降り、坂道の上にある、実家を見上げる。（略）この実家は、今秋、人手に渡る」と、これから何が起きるのだろう、と先が読みたくなるような仕掛けがなされている。そこから、6年前に父が亡くなったこと、家や庭の様子へと展開するが、父の名の表札や庭土だらけの父のサンダルがそのままであることなど、細かいことも忘れずに書いている。「最後の「ただいま」を言おうと、戸に手をかける」の「最後の「ただいま」というほんのひと言に作者の気持ちが込められていて素晴らしい。そして母とのやりとりで紛れてその「最後の「ただいま」を言いそびれてしまった」という絶妙な間合いのユーモア。最後の父を偲ぶ声、「ね、お父さん」。父を愛していた気持ちが伝わる。説明を省いた天下一品の終わり方で感心した。

優秀賞「ご褒美」（松田良弘さん）

祖母と孫である作者との間に流れている温かい愛情が、読む人にじんわりと浮かんでくる。高校時代、部屋に閉じこもっていた自分を訪ねて窓の外から声をかける祖母。ここに「○○ちゃん、」といった名前を入れるともっとよかった。私が感心したのは「祖母は手を振る代わりに、杖を軽く持ち上げた」と書く観察力。二人の間に素晴らしい関係が築かれていることが伝わる。祖母が病院に運ばれたと連絡を受けた時の「そこには祖母が買ってくれた自転車が、鼻息を荒くして待っていた」は、絶対に他の人には書けない、世界中で作者だけの表現である。こういう言葉があると嬉しくなる。「久しぶりの自転車にふらつきながら」という描写も、説明せずに自身の不安をよく表している。最後の「祖母は杖をハンドル代わりにして、ペダルを漕ぐまねをした」も本当に小憎らしい、素晴らしい終わり方だ。

佳作「二度目の初心」（常世ゆかりさん）

シジュウカラと人とを比べて、生きるために生まれてきた、をキーワードに生と死とを考え

ている。「もののあはれ」をさえ感じさせる名エッセイ。「超小型カメラで巣箱を毎日覗き見しているのが後ろめたく」というのはユーモア。学問としての心理学ではなく人に接する臨床家としての立場の気持ちが「後ろめたく」によく出ていて感心した。「私には、その黄色い口が、薄暗い巣箱に灯ったあたたかな灯火のように思えた」という描写も上手い。生まれだての雛に「生きるために生まれてきた」という意志を感じるや否や、「人は死ぬために生まれてくる」と信じている自分を発見したという。その特異な感覚を興味深く読んだ。「胸の石を心できつく握りしめて、人は死ぬために生まれてくるのだから、と繰り返し自分に言い聞かせていたのである」の「胸の石を心できつく握りしめて」は素晴らしい表現。シジュウカラという卑近な例から自身の生まれてきた意味について深い考察を行っている。